

正信念佛 23

■曇鸞讚①

**本師曇鸞梁天子
常向鸞處菩薩礼
三藏流支授淨教
焚燒仙經帰楽邦**

本師曇鸞は、梁の天子、常に鸞のところに向かひて菩薩と礼したてまつる。三藏流支、淨教を授けしかば、仙經を焚燒して樂邦に帰したまひき。

現代語訳

曇鸞大師は、梁の蕭王が常に菩薩と仰がれた方である。菩提流支三藏から淨土の經典を受けられたので、仙經を焼き捨てて淨土の教えに帰依された。



曇鸞大師（476～542）67歳 往生 ※538年、日本に仏教公伝

○「本師曇鸞梁天子 常向鸞廻菩薩礼」

- ・四論を学ぶ（『中論』・『十二門論』・『大智度論』・『百論』）
- ・梁の皇帝、蕭王から学識・人格を評価され、「曇鸞菩薩」と敬礼される。
『高僧和讃』

魏の天子はたふとみて 神鸞とこそ号せしか
おはせしところのその名をば 鸞公巖とぞなづけたる

○「三藏流支授淨教 焚燒仙經帰樂邦」

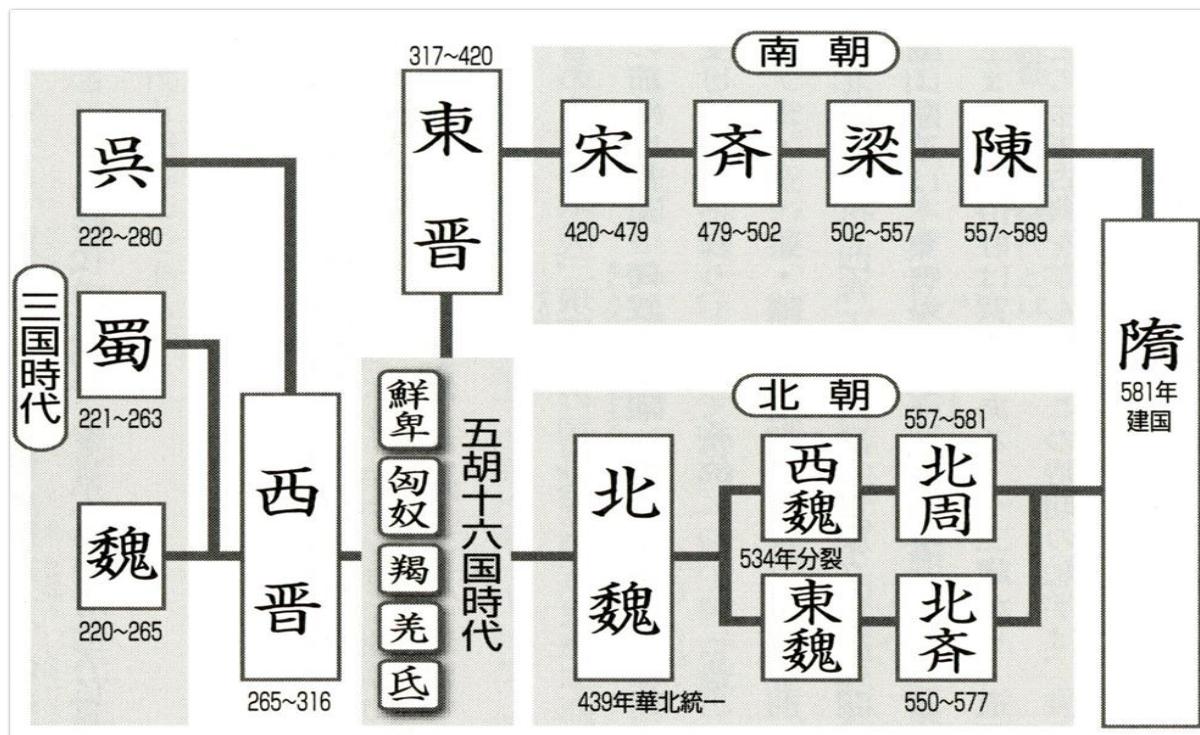
曇鸞大師は、『大集經』30巻の註釈を完遂させる為に長寿を求める。

→長生不死の仙術を説いていた陶弘景を訪ね、3年間修行して仙經10巻を授

与される。帰途、洛陽にて菩提流支三藏と出会う。菩提流支に「仏法の中に仙經に勝る長生不死の教えはあるや」と尋ねると、菩提流支は地に唾して、「言語道断、たとえ長生きをしても結局は死に、迷いの世界を流転するにすぎないではないか。仏教には悟りにいたって無量の寿命を得る法がある」と教える。この時『觀無量寿經』を授かり、仙經を焼き払い淨土教に帰依。

『高僧和讃』

本師曇鸞和尚は 菩提流支のをしへにて
仙經ながくやきすてて 淨土にふかく帰せしめき



【北朝（386～577）】

※581年、隋王朝の成立

◇国家による仏教の保護と太武帝 [《北魏》在位 423～452] による、
廃仏毀釈（446～452）。「三武一宗の法難」の最初

- ・国家の公認により積極的な保護を受けた仏教教団は、莫大な財産の所有や出家者の増加によって、腐敗・墮落の方へと傾いていた。
- ・446年に廃仏が行われ、多くの出家者が殺され、寺院や仏像、経典が焼かれた。
- ・皇帝の交代により仏教は復興し始める。
- ・460年、曇曜 [生没年不詳] による雲崗石窟寺院の造営の開始
→ 太武帝による廃仏からの復興の象徴

◎このような時代状況の中で曇鸞大師（476～542）は登場する



